

庄藏に塔婆を持たせ鐵心を附けて新樹庵へ差向けました。送つて来た鐵心は新樹庵の門を入るとよく云ひ含めて自分は還つて終ふ、庄藏は示された儘に玄關に立ち「お頼み申します」「ドレ」と弟子哲梅が来て見ると髪蓬々とした若い男が立つてゐます「何御用です」「極樂へ連れて往つて下さい」「ナニ」「極樂へ連れて往つて下さる様禪師様へ願つて下さい」「何處から来た」「越前永平寺から教えられて来ました、禪師様に遇へない其中は半年でも一年でも此處に立つてゐます」目の様子が變つてゐるのには哲梅も薄氣味悪くなつて奥へ往き、禪師に此旨を告げると、禪師は笑ひ乍ら「そりや日外の仕

返した、宜しく遇つて遣らう、是へ通せ」哲梅が連れて来た庄藏は成程眼が据つてゐる「汝が永平寺の禪居から申附かつて来たのか、何う云ふ譯か話を致せ」「へえ貴僧が一休様でございますか、實は云々で」と親父が死んで以來の事を話し、私が是非親父に遇ひたいといふと、それは一休禪師様にお願ひ申せ、必然遇はして下さいと仰有つたので参りました、何うぞ極樂へ連れて往つて下さい」「成程然うか、汝それ程遇ひたいか」「遇ひたくて耐りません」「うむ面白いな遇はしてやらう、先づ湯に入つて腹を拵へろ」「へえ湯に入らなければ親父に遇へませんか」「勿論だ、死人に湯灌をする通り體軀を淨め

なければ極樂浄土へは參られん「へえ成程」第一充分に食事を仕な  
いと腹が空つて仕様がな、道が遠いからな「何の位も遠ございま  
す」「十萬億土ぢや、汝に歩けるか」「歩けますとも、少し早起きをし  
て歩くと日に十五里、日の長い時なら二十里歩けます」「コレ／＼那  
様事では行違ひになる」「何う云ふ譯でございます」「よく考へて見な  
さい、一日に假に二十里として月に六百里、一年に積れば七千二百  
里で、先方へ着くには十年餘り費る、其中には親父が度々娑婆へ遣  
つて来る汝寧そ此方に待つて居て遇ふては何うぢや」「可けません、  
瞞着うと思つても駄目です、行違ひになつても關ひませんから連れ

て往つて下さい「然う云ふ事なら案内しやう、兎も角も湯に入んな  
さい」庄藏欣んで湯に入り月代をしてサツパリし悉皆支度をして  
禪師の居間へ行くと「コレ／＼食事を致せ、貧道の見る前で高盛の  
飯を五杯食へなければ可かん」「へえ畏りました」庄藏は無暗に詰込  
んだが到頭一杯半餘した「モウ可けません腹がはち切れさうだ」「好  
し／＼案内するから此方へ來い」弟子僧等は驚いてゐると、禪師は  
委細關はず庄藏を本堂へ連れて往つて、自分は倚子へ凭り「庄藏よ  
いか「宜しうございます」途端にフツと燈火を消した、庄藏は吃驚  
して「大層暗うございますな」「暗い所に父が居るのだ見えないか

「見えません」其中禪師は庄藏が越前から持つて来た塔婆を、豫て用意の筆で墨黒々と塗つて終つた「さあ庄藏急げ「急げと仰有つたつて些しも見當が附きません」庄藏は闇暗の中で間誤ついてゐる。

三五 夢は醒めたが眼は覺めぬ

その中また燈火が點く、全然夢の醒めたやうで庄藏は茫然してゐる「何うだ庄藏急に明るくなつたらう、見えるか「見えませすとも、燈火が點けば明るくなり、明るくなれば物が見えます「然うか、庄藏其處だ、其處をよく考へて見なさい、

燈の消えて何地に往くやらん

暗きが元の住居なりけり

この黒く塗つた塔婆を持つて返れ、禪居が何とか申すに相違ない、「然うするとこの暗い處が地獄でございますね「然うだ、總じて彌陀の十萬億土は暗い處であるから汝が訪ねて往くよりは一週忌三回忌七回忌等に父が来るから其時に遇ひなさい、遇ふに付ても早く女房でも有ち、子供でも設けて我が家を盛んにして置かぬと父に申譯がなく、これが何よりの不孝であるぞよ、心を落付けて熟く考へて見なさい、さあこの塔婆を携つて歸んなさい」黙つて聞いてゐた庄

藏は、根が愚ではない男と見えて涙をポロ／＼溢し「有難うござい  
ます、それでは御諭に従ひまして越前へ歸ります、禪師様御機嫌宜  
しう」温順しくして新樹庵を立出で、其儘越前へ歸つて永平寺の禪  
居に遇ひ委細を話すと、禪師は色を變へて愠つた、他の物と異ひ塔  
婆を塗るとは不都合だ、今度こそは一つ問答しなければならぬと、  
自身京都へ出掛けて來りました。故と汚い法衣を纏ひ、新樹庵の玄  
關へかゝつて問答を申入れると、快く通された。禪師は取次の者が  
ら雲水の僧と聞いた時捷くも禪居と覺り、書院へ來て見ると禪居は  
坐眠をしてゐる。實はまだ遇つた事はないのでよくは分らぬが確に

是れだと睨んで前の椅子に倚と、大きな眼を開いてグウ／＼軒を搔  
いてゐる。旋て禪居は眼を覺して「あゝ、好い心地だ」と云ふと、禪  
師是れを聞いて「浮世の夢が醒めたのか但し雲水の眼が覺めたのか  
」夢は醒めぬが目は覺めた「然うかい汝は何だ」野衲は日本六十餘  
州雲水の身で、只風のまに／＼飛歩いてゐるが、禪師の道德堅固と  
衆に秀でた才智を慕つて一と問答參らうと心得る「ハ、ア然うか、  
貧道は那樣面倒な事は大嫌ひだが、宗法として斷る譯にも參るまい  
何なりと質ねなさい」若し答への能ざる時は如何「傘一本で當寺を  
開く」當寺を開いた其後は如何「肥料になる」汚いな「されば生あ

る中は格別、死すれば何人も肥料となる他はあるまい「うむ面白い  
な、然らば質ねる、此程越前の國から極樂の道を尋ねに参つた者が  
ござらう「あゝ庄藏か「如何にも、其時禪師には本堂へ連れ行きて  
燈火を消し、暗に乗じて父の在所を教えて暗に諭したは好いが、何  
故塔婆を眞つ黒にお塗りなされた」禪師は此時突如に「禪居「ハッ  
「ホラ返事をしたな」禪居しまつたと思つたが取返しが附かない、  
據ろなく椅子を離れて三拜九拜の禮を行ふと、禪師は呵々と笑つて  
「禪居、汝に遇ふのは是れが始めてだが、貧道は汝の來るのを樂み  
に待つて居つた。併し禪居、僧侶は世捨人だ決して慍んなさんな、

腹を立つのは宜しくないぞ」此時禪居筆を執つて、

明るくも行かれる道をすみで塗る

死出の山路は何處なるらん

と書いて示すと、禪師は直ぐ筆に墨を啣ませ

明るくも暗くも行くが佛なり

死出の山路に夜晝はなし

と書き「禪居どうじや」禪居少時考へてゐたが、ハタと膝を打つて

「悟道徹底、誠に恐れ入りました「解つたか「解りました「然うだら

う、物は悟にある、悟つて見れば塔婆を塗つても塗らずに置いても

同じ事だ、禪學の秘奥は此處にあるのぢや、よく考へなさい「何うも恐れ入りました」

### 三六 嫉妬喧嘩は廢しなさい

茲に出雲大原の郷士に水谷幸右衛門といふ人がありました。五百石の地持で至つて裕福、家では呉服屋を片手間に營む處から、京都三條小橋の柳屋を定宿として折々仕入れに出府し、毎も二ヶ月位は逗留してゐる。處が柳屋の世話で滞在中のぶといふ妾を抱へ、手廻りの一切の世話をさせてゐました。禪師には偶とした縁で可愛が

られ、上洛すると新樹庵へも尋ね、禪師も柳屋へブラリと御出なさる事もありました。頃日恰度滞京中なので、一日禪師が柳屋へ御出なさると、幸右衛門は妾と嫉妬喧嘩の最中でした。嫉妬の種は妾の許へ来た一通の手紙で、元此女が廓奉公をした當時の情夫から送つて来た舌ツたるいもの、併し餘程時代のついた古手紙を幸右衛門が見附けたが、生憎自分が明盲目なので騒ぎは漸次大きくなつた處、禪師は飛んだ處へ来たと眉を擡めてゐると、幸右衛門はその手紙をそれへ差出し「禪師様此女は誠に不都合です、恚うして隠し男を拵へて置き乍ら、此手紙の出所に付き曖昧な事を申して居ります、何

うぞ一寸御覽下さる様に「禪師チロリと女の方を見ると、目顔で切りに助けを請ふ様子、禪師何となく不愜になつたが、然あらぬ態で「然うかソリヤ不都合ぢや、ドレ／＼其手紙をお出し、貧道が讀んで遣らう」「何うぞ願ひます」「コレ／＼幸右衛門、貧道が今高らかに讀む此手紙の一字一句を、聞落さないやうに聞いて居れ」「何う致しましたして聞落す事ぢやございませせん」「好し／＼、え、と何ぢや、御前様事出雲大原の郷士水谷幸右衛門様のお世話になり、近頃は氣樂な御身上御羨ましく存じ参らせし、尤も一度幸右衛門様を御見上げ申じし處、鼻低く眼は鋭く頭は餘程禿げた鳩胸デツチリの醜男なれば

……………「モシ／＼禪師様那樣手紙はありますものか」「莫迦を云ひなさい、書いてあるから讀むのだ」「デモ皆んな間違つてゐます」「そんなら汝自分で讀め」「私には讀めませせん」「だから貧道が讀んでやる聞きなさい、え、と、御辛抱なされ難き時もこれあるべくしへども、餘程親切なる御方の由、此上は何事にも御心を附けられ幸右衛門様を大切に遊ばすやう念じ上げ参らせし。何うぢや幸右衛門様云ふ手紙ぢや、是れはな此女の元の朋輩が親切にのぶに心附けて遣したもののぢや、何うだ分つたか」「へえ然う致しますと別に仔細ないのでございますね」「仔細ない處ではない、汝も共々欣んで差支ない手紙

ぢや、ナアのぶ然うではないか」妾は雀躍して欣びました。實は疾うに焼捨てやうと思つたのをツイ忘れて幸右衛門に見附かり、何うなる事かと心配してゐた處を、禪師が粹を利かして巧く扱つて呉れたので辛く助かり、肚の中では手を合はせて拜んでゐました「何うも禪師様有難うぞんじます、仰せの通り朋輩から参りましたのを旦那様に申上げずに置きました爲め、飛んでもない疑惑の種を蒔きまして申譯ございません、以後は必然氣を附けます」然うか好しく是れからは朋輩の女たりとも漫りに手紙の往復など致さんが宜い、幸右衛門の眼が明らかに見えるなら宜いが、全然節穴同様なのぢや

から氣を附けなさい「禪師様それは酷うございます」「まア幸右衛門愠るな、人は愠つたり嫉妬を炙いては往かん、女一人の爲めに満らぬ禍を惹起す例はある、氣を附けなさいよ」のおといふ女はつく／＼禪師の計らひに敬服して終ひ、是れからその情夫とキツパリ手を切つて幸右衛門を大切にしたといふ話。

三七 前代未聞不思議な引導

丹波國龜山の城主二階堂信濃守は、豫て禪學に志して深く禪師の徳を慕ひ、年に一度新樹庵を訪ねて講義を聴いてゐたが、此度大



病となつて全治の見込なくモウ餘程の重態、就ては愈々臨終の時禪師の引導を受けたしとあつて、重臣小山次郎左衛門を以て此儀禪師へ願ひ出でました。禪師快く承諾したが直ぐ往くとは云はない駕籠は嫌ひ歩くに限ると我を張つて、一先づ次郎左衛門を先へ歸しました。次郎左衛門は龜山へ立歸つて主人に此旨を告げると信濃守大きに喜び「何うか息ある中にお目通りしたい」と只管待暮し、子息越後守晴高はじめ家臣一同も、今日か翌日かと待受けたが禪師の姿も見えない。本意ない思ひで到頭信濃守は瞑目して終ひました。家中の嘆きは一通りではない、併しまだ引導が渡してないので、一同胸

を痛め今日邊りは禪師お出になるであらうと、街道筋へ迎ひに出で來ると、城下外れの小さい飯屋に、汚い坊主が腰をかけてゐました。若侍はそれへ來て「コレノ御出家何ぢや」拙者共は當二階堂家の家來だが、新樹庵の休禪師が今日邊り御光來になる筈なので迎ひに罷り越したのだ、若し途中で禪師を御見掛け申しはしなかつたかな「あゝ然うかい、一休は後から來なさるよ」平氣なものでズン／＼往つて終つた。ソレツと云ふので家中の者は多勢其處に出迎ひとして待暮したが更に姿も見えない。スルト大手の所に居た小山次郎左衛門が、向ふからブラ／＼來る汚い法衣の坊主をヒョイト見

るとそれが意外にも禪師なのに吃驚し、俄かに騒いで城内へ案内し  
 子息越後守首め重臣一同出迎へて御禮を述べ、信濃守の死體のある  
 處へ直ぐ案内すると、禪師死骸の上に跨つてじつと死顔を視てゐた  
 が、突如その顔から胸の邊りへ青痰をカツと吐きかけ「是れで極樂  
 浄土へ往くよ」と澄してお在なさる。家老關澄彈正烈火の如く怒り  
 詰寄つて刀の柄へ手を掛ける。子息越後守も顔色を變へ「禪師お戯  
 れも時に依ります、苟にも丹波龜山七萬石の城主………」と云ひ  
 かけると、禪師呵々と笑ひ「ソレそれだから貧道は故と遅く來たの  
 だ、信濃守はまだ大悟徹底しないし、汝方がそれだから目を瞑つた

處へ來て遣つて、結構の引導を渡して遣つたのだ。厭ならよしなさ  
 い、貧道の方で斷る」と云つて、次郎左衛門が詫びるのも諾かず  
 イと歸つて終つた。さあ後では別に僧侶を招いて引導を渡すやら近  
 親一同で湯灌をするやら大層な騒ぎ。スルト不思議にも信濃守はま  
 だ全く息を引取らない様子で、折々ピク／＼動いてゐる。奥方はじ  
 め近親の者は色を蒼くして相談すると、子息と家老とが禪師の引導  
 に逆つた爲め佛罰を被つたに違ひないと評定一決し、次郎左衛門早  
 速早馬で新樹庵へお詫びに來ると、禪師は笑つて「越後守はまだ齡  
 が若いし彈正は思慮が浅いから困るな」と仰有つたがモウ再び龜山

へ往くのは忘だといふ。乃で漸次絶ると、城下外れの飯屋に貧道が一寸戯れに書いた衝立がある故、それを持つて參つて枕頭へ立てろといふ。次郎左衛門據ろなく暇を乞ひ、歸り路にその飯屋を搜して立寄つて見ると成程衝立があつて蛸の繪に禪師の讚がしてあつたので、それを買取つて持歸り、早速信濃守の枕頭へ立てると、不思議や死人はニヤ／＼と笑つて全く往生を遂げたのには、一同只驚く許りであつたといふ。

### 三八 水を飲んだら粥を食へ

その頃京師は漸次騒がしくなり、厭な噂が起るやうになつたので禪師は新樹庵を哲梅首め弟子一同に委せ、泉州住吉邊へ小やかな庵を結ばうと思ひ立たれたが、まだ參詣した事がありません。乃で例に依つて飄然と立出で、夜船で大阪へ着いて住吉へ詣で、神官に遇つて委細を頼むと、神官も快く承知し、茲に思ひ立つた通り庵を結ぶ事となつた。食事其他は本社で賄ふ事となり、禪師は庵の名も大菜庵と名けて、氣樂に此處に起臥する事となると、一日飾りを仕た牛に乗つて訪ねて來た者がある。久我大納言道秋卿の次男で藏人といふ變り者で、號を牡丹花松柏と云つて和歌俳偕の道に長じ、清

風明月を伴侶として堺の町に寓居を構へてゐる人、頃日聞けば京都新樹庵の休禪師が住吉の社内に庵を結んで居るとの事に、今日こそ禪師の志を試さうといふ氣で或夕大菜庵の門を叩き「お頼み申す、庵主御在なればお目に懸りたい」と申入れた。禪師圓窓から表をヒョイト見ると大きな牛に乗つてゐる「ハ、ア是れが松柏といふ變り者だな」と思つたので、故と窓の内から「庵主はゐるが何處から來なされた」といふと「住吉の表門から來ました」といふ返辭、禪師は恁う云ふ人が好きだから欣んで立迎へ「松柏此方へ通んなさい」「へえ「宜いから關はず通んなさい」「左様御免を被つても宜しい

かな「宜いともく、併し牛は戶外へ繫いで置きなさい、貧道の庵には牛の座る處がないから「それは不自由だな」松柏も笑ひながら牛を繫いで入つて來た「エ、禪師始めて對面いたす、手前は牡丹花松柏と申す者で……」「それは心得て居る、心得て居ればこそ汝の名前も呼び、通らつしやいと云つたのだ。那樣面倒な事は廢しなさい「へえ「イヤ併し貧道も汝の名を何處か此邊に住んでゐる事を聞き、一度遇ひたいと思つてゐた。能く來なすつたな「恐れ入ります、直き堺の町續きで分りの宜い所、手前も是れから折々お訪ね申しますれば、禪師にもチト御光來を願ひたうございます「何か御馳走し

やうかな「然うでございますな、何か御馳走になりませう。ダガ碌なものはありますまい」「うむ流石は松柏よく知つてゐるな、如何にも碌なものはない。併し水は澤山ある、是れを御馳走しやう遠慮なく飲みなさい」「冷たうございませうな」「イヤ水といふものは寒くなる程暖かいものだ、飲んで見ると却々美味い味を有つてゐる」「一杯頂きませう」暢氣なもので水を二杯飲んだ。其中禪師手拵へで粥を炊き梅干を添へて出し「サア〜貧道も食べるから此粥を啜つて往きなさい、腹は暖まつて何より薬餌だ、今夜は月が出る、牛に乗り月を履んで歸るのも面白からう」とそれから二人で粥を啜りて様々の

話に打興じて松柏が別れを告げやうとする時禪師は其袖を控へ「今度何日來るな」「命あらば明日参ります」「死んだら貧道が引導を渡して遣らう」「有難うございます、併し引導は死んでからでは役に立ちません、息ある中に願ひます」「うむ汝は却々理屈を云ふな、ダガ汝は死ぬ時が分るか」「へえ」「眠る時が分るかよ」「うむ」松柏これには一言もない「禪師、手前は毎晩枕に附く時は知つてゐますが、眠る時は存じませせん」「それ見なさい、人間に死ぬ時が分るものではない引導は死んでからだ」

禪師或時大菜庵で松柏と話をしてゐると「御免下さいまし」と案内を請ふ者がありました。四十格好の町人で寒い時分に汗を流してゐる。松柏の取次で禪師が遇ふと、此男は堺の薬種問屋小西屋利兵衛の手代宗七と云ふ者であつた。「少々禪師様にお願ひがあつて参りました」「何だい」「餘の儀ではございませんが、手前主人に竹次郎と申す一人息子がございまして、まだ若い男でございまして」「主人の悴なら若い男に違ひ莫らう」「どうも恐れ入りました」「それが何うした、

### 三九 早く身上を潰して終へ

「唯、只今申上げます、實はその三四年前から乳守の廓の遊女屋鍵屋長兵衛の抱へ地獄太夫といふ名高い遊女に現を抜かして、モウ三千兩餘り費ひ果しましてございまして」「成程些し許り費つたな」「どうも亦恐れ入りました、處で主人もそれ程悴が思ひ込んでゐるなら、身を受けて女房にして遣らうと粹を利かせまして、私が掛合に参りますと太夫が肯きません、段々訊ねますと太夫は足利浪人梅津嘉門といふ者の娘で、兄は難波の侠客野晒悟助と申す者、今自分が身の軽くなるのは好いが主人に薄情に當る、若し竹次郎に實意があるなら十年通へと恚ういふ譯なのでございまして。主人の悴は是れを聞くと發

狂して終ひ、醫者にも掛らなければ薬は猶飲みませず、明暮れ地獄太夫の事ばかり申して居ります、親類の者も心配致し是れは禪師様にお願ひするより他はないと、恚様な次第で私が出ましたのでございませ、御聞濟下さいませれば有難うございませ「然うか、好しく、折角の頼みだ往つて遣らう、汝は先へ歸つて主人に安心させろ「有難うございませ、それでは何分お願ひ申上げませ」宗七は欣んでドン／＼歸る。禪師は松柏を連れ、牛を留守番に残して小西屋へ往くと大層な喜び方で、家内の者は勿論親類一同出迎つて禮を云ふ。禪師は相滌らず無頓着で「コレ／＼小西屋の主人「へえ「當人

は何處に居る「奥の一と間に居ります、御案内致しませう「亂暴でもするか「否え左様な事は致しません「それでは貧道一人その座敷へ入るから皆んなは次の間に居るとも中へ入つては可かぬ、宜いか「畏まりました」松柏をはじめ一同次の間で什麼な事を爲さるかと耳を澄してゐると、禪師はガラリと襖を啓ける、中では竹次郎は人の見さかひもなく突如「お、太夫来たか」と云ひながら禪師の法衣の袖を緊かり捉へて離さない、禪師は捉へられた形其處へ座り「竹次郎、狂人になつて兩親に心配をさせるとは何事だ、貧道は一休ぢや解らんか」と云ふと根は幾らか學問のある男、それだけは稍く分

つた「あ、禪師様でございませうか、失禮を致しました、太夫同道でよく御出下さいました」まだコリヤ可かぬな、コレ竹次郎汝は何うして氣が狂つた「禪師様御情けない事を仰有います、氣が狂ひは致しません、太夫があんまりつれない事を申しますから情ないと思つて居ります、私は太夫の處へ四年通ひ、三千兩も費ひましたから身受しやうと申しますと、實意があるなら十年通へと太夫は申しますわたくしは後六年通はなければなりません、それが如何にもつれないのでございませう「然うか、それなら汝は太夫の云ふ通り縦令六年でも七年でも通ふが能いではないか、何故通はぬ、氣の小さい奴だ、散

々通つて此身上を潰して終ひなさい「左様でございませうか、禪師様潰して宜しふございませうか「ア、能いともく早く潰すが宜い、何うせ通ふなら根こそげ通はなければ太夫の意が解るものではない早く潰して終ひなさい」次の間に聞いてゐた兩親や親類は眼を圓くして驚いてゐる。

四〇 廓へ通ふなら通ひ貫け

狂人の竹次郎は何にも知らず大喜び「左様なら禪師様の仰有る通り、通つて通つて通ひ貫きます」然うだく通ひ貫け、然うしなけ



れば對手の意は分るものではない」禪師様は恚う云つて腰に差して  
 ゐた扇を取つて渡した「竹次郎、此扇に道歌が書いてある、氣を鎮  
 めて能く考へろ、是れを三日の間に考へ當てれば太夫は十年を待た  
 ず喜んで當家へ來る「有難うございます」開いて見ると、

暗の夜に鳴かぬ鴉の聲聞けば

生れぬ先の父ぞ戀しき

と書いてあつた「禪師様解りません」ダウラ三日の猶豫を遣る、そ  
 れで若し分らんければ廓へ參つて地獄太夫に訊け、其時には必ず一  
 人で參つては可けぬぞ、家内の者を大勢伴れ金は車に積んで持出し

てドン／＼遣ひなさい」兩親が次の間で、禪師様は大變な事を教へ  
 て下さる、全然狂人に及物だと氣を揉んでゐる處へ禪師は出てお在  
 なすつた「イヤ御兩親聞いてゐなすつたか、今貧道が扇を渡して置  
 いたがあれで大抵癒る、併し三日経つても道歌の意味は竹次郎には  
 解るまい、スルト太夫の許へ往くと云ふから立派に出して遣りなさ  
 い、歌の意味を考へてゐる内に氣は鎮まるから幾らも遣ひは仕まい  
 縦令遣つた處で金よりは忤の命の方が大切だ、解つたかな「有難う  
 ぞんじます」兩親はまだ禪師の爲る事は解らないが、切りに禮を云  
 つてゐると、松柏を連れてブイと歸つて終ふ、兩親は竹次郎の様子

に眼を注<sup>つ</sup>けてゐると一と間所で扇と首ツ引を仕て切りと考へてゐる  
 一日二日三日と経つたが何うしても解らない。四日目の朝になつて  
 のこゝ出て来た「お父つアん」何だ竹次郎「私はこれから廊へ参  
 つて太夫に遇つて参ります」「ホーラ始つた」「何が始まりました」「ナ  
 アニ此方の事だ」「それなら禪師様が仰有つた通りお金を澤山車に積  
 んで下さいまし、今晚一と晩に遣つて参ります、それから家の者を  
 四五人伴をさせて下さい、何うせ此身上は長い事はありません、私  
 が皆んな費つて終ひます、禪師様が潰しても能いと仰有いました、  
 「何うでも勝手にするが宜い」小西屋利兵衛も少し驚いたが禪師様

の爲さる事には何れ深い思召があつての事だらうと、女房とも相談  
 して宗七他四五名の手代を伴につけて二三百兩持たせ、立派にして  
 出して遣ると竹次郎は大層欣んだ。此時分の二三百兩といへば大し  
 た金、それを持つて鍵屋長兵衛方へ往つた竹次郎は、大盡遊びをし  
 てパツバと費ふ。地獄太夫は竹次郎の狂人も知つてゐるし、伴の手  
 代から仔細を聞いてゐるので其扇を竹次郎から受取り、暫く押戴い  
 てゐると、竹次郎は「太夫何う云ふ譯だか教えてお呉れ、禪師様は  
 お前に訊けば解ると仰有つた」と切りに訊ねる。併し三日氣を鎮め  
 て考へてゐたので、餘程様子が良い處へ太夫に遇つた爲めにスツカ

リ沈着おちついてゐた。太夫たいふは其様子そのやうを見てゐたが、根ねが伶俐りやうの女をんな「是れは妾わたくしには解わかりませぬ、幸さいひ禪師ぜんじ様さまには一度御眼ごめに掛かりたいと思おもつてゐました所ところゆゑ、明日住吉社みやうにちすみよし内の庵いほりへ伺うかつて歌うたの意味いみを伺うかつて参まゐります「然さうかい、何どうか然さうしてお呉くれ」就つては貴方あなたは直すぐ御歸おかへりなすつて下ください、是これが解わかるまでは一夜やたりとも恚かや様な處ところにゐらしつては禪師ぜんじ様さまに濟すみませぬ、御兩親ごりやうしんには猶なほ更さらでございませすから……」と懇々こんく異見いけんすると、モウ殆ほとんど正氣しやうきになつてゐた折柄せりからし泌しみみく云いはれたので竹次郎たけじらうハツと氣きが附つき、その儘ま柔順すなほに歸かへつて終しまふ遣つかつた金かねは二三十兩りやう、兩親りやうしんは大層たいそう喜よろこんでゐる。

#### 四 一 禪師ぜんじと地獄太夫ぢごくたいふの問答もんたふ

その翌ある日ひ、地獄太夫ぢごくたいふが二人ふたりの禿かむろを連つれて禪師ぜんじの庵いほりへ訪たづねて來きました。見物けんぶつが多勢おほぜいゾロゾロ隨ついて來くる。折柄せりからし來合きあはせてゐた松柏しょうはくが圓窓まるまどから見みると此この有様ありさまに「禪師ぜんじ地獄太夫ぢごくたいふが参まゐりました「あゝ然さうか」ツカ／＼と上あり口くちへ來くると太夫たいふが立たつてゐる「何なにしに來きた」唯はい賤いやしい身みで禪師ぜんじ様さまのお側そばへ伺うかひますのは恐おそれ入いりますが、此度このたび小西屋にしや竹次郎たけじらうへ下くだし置おかけました扇あふぎのお歌うた、何どう云いふ意味いみか伺うかひに出でまし

てございます「さうかまア上あれ「左様さやうなら御免ごめんを被かります」太夫たいふは

しとやかに上つて來ると、爐には焚火かしてあり、自在には爛鍋が掛つてゐる、太夫その様子を見ると鍋の中は諸味酒といふ彼の濁酒らしい。禪師はそれを自身に酌んで一松柏、是れを太夫に遣んなさい「畏りました、太夫、是れは禪師自ら下された諸味だ、有難く頂戴致すがよい。其方も今日女と生れて定まる夫もなく、浮川竹に身を沈めて居るは不便な事、早く心掛けて良い夫を持ち、貞節を盡すがよい、併し己れの心を淨める爲めに暫く山へでも住むが可いな、サア／＼頂きなさい」切りに薦めたが見向きもしないでニツコリ笑ひまして、

山居して心清むる身にしあれば

濁酒など争で飲むべき

懐紙へ書いて澄してゐる、松柏は赤面して差俯く。禪師カラ／＼と笑ひ「ハ、ア松柏遣られたな、太夫、是れを見なさい」スラ／＼と書いて渡した紙を見ると、

山居して飲むべき物は濁酒

とても浮世にすむ身ではなし

太夫は押戴き「どうも恐れ入りました」松柏警討をして遣つたよ「有難うございます」太夫も一緒に笑つてゐたが「偕禪師様へ伺ひます

「何ぢや」あの、竹次郎へ下さいました暗の夜のお歌、お蔭を以て  
 當人の發狂も大半癒りましたにつきましては御禮 旁 妾が伺ひに出  
 ましてございます、あれは何う云ふ意味でございませうか「うむ然  
 うか、あの歌は竹次郎の發狂を癒す爲めの一時の方便、別に何でも  
 ない、併し竹次郎も幾らか學問のある男だ、氣を沈着ければ癒るに  
 定つてゐるのだ、歌があれば別に何でもない、只悟りの道を示した  
 もので何でもない、あれは貧道も知らないよ「へえ、では禪師様も  
 御存知がないのでございませうか「うむ知らない、ダガ一體人間とい  
 ふものは、此世に生れて來ればこそ種々の慾が出る。金が慾しいと

か美味しい物を食ひたいとか、皆んな迷ひだ、ソレ生れぬ先の父ぞ戀  
 しきといふのは其處だ、生れて來さへしなければ別段苦勞もなけれ  
 ば迷ひもない。暗の夜に鳴かぬ鴉の聲聞けばといふのは、ありや産  
 聲だ、産聲を揚げて生れて來ない昔と思へば、何事も諦めのつくも  
 のだといふ歌の意味だ、何うだ解つたか「恐れ入りました、御蔭さま  
 で道が啓けましてございます「然うか、まア遊んで往きなさい、モ  
 少年の暮れるのにも間がない、來春は貧道が、年始に竹次郎の所と  
 汝の許へ往くから待つてゐてお呉れ「左様でございませうか、禪師様  
 が御出下さるとは願つてもない幸ひ、必然御待申しますが何日頃御

出なさいませうか「命があれば元日往く、往つたら御馳走してお呉れ「畏まりました、如何なる物が御意に適ひませうか「然うさね、貧道は變な性分で、他の喰はないものが好きだが、他の喰ふ物なら大抵嫌ひだよ「左様なら他様の喰らぬ禪師様の御嗜好のやうなものを拵へて御待申ます「何うか然うしてお呉れ」是れで地獄太夫は立歸りました。

#### 四二 正月は何故目出たい

其内に一夜明ける、モウ今日は正月の元日、禪師愈よ年始に出掛

ける事となつた「松柏今日は一つ年始廻りをしやうかな「宜しうございませう」此頃では松柏も大菜庵の者になつてゐます、禪師も遠慮なく用を命ける。「では松柏竹を一本切つて来て呉れ「承知致しましたが一體何になさいませう「まあ能いから切つてお呉れ、篠竹で宜しい」松柏はコリヤ亦何か悪戯をなさるのだなと思ひ乍ら、手頃の篠竹を切つて来ると、禪師は案の定豫て床の間に据へてあつた鬮をその竹の先へ附け「さあ往かう」と先に立つ。松柏は驚いたが黙つて後に隨いて往くと、禪師は鼠の綿服に麻の法衣、草鞋を穿いて堺の町へ出るとゾロ／＼人が跟いて来る、小西屋利兵衛

の店へ「ハイお目出度う」と聲を掛けると、竹の先に鬮體が附いてゐるので、店の者は躊躇してゐる處へ利兵衛が出て来た「是はく禪師様、昨年中はいろく御懇命を頂きまして有難うございます、疾うに御禮に出ませんければなりません、ツイ手前にかまけまして御無沙汰を致して居ります「コレく利兵衛、今年になつたら今年の事を云ひなさい、去年の事など云ふと昔に返つて面白くない、「へえ、何うも相済みません「竹次郎は何うだ「御庇さまで大分宜しうございました、今日は奥で書物を讀んで居ります、まあ何うぞ御上り遊ばしますやう「イヤ關はつしやるな、竹次郎は靜かに書を

讀まして置きなさい、此處へ呼ばツしやるなモウ一ヶ月も経てばスツカリ癒らうから「有難うございます、兎も角も御上り下さいまする様、コレ誰れぞおすゝぎを持つて御出で「イヤく然うしては居らん、又來る、是れは年玉に持つて來たのだが置いて往つては窮るだらう」竹の先の鬮體を利兵衛の鼻の先へ突出すと、利兵衛も是れには困つた「何うぞ御持歸りを願ひます「然うか、では家中の者の頭部を撫で、遣らう「御串戯を遊ばします」利兵衛は苦笑してゐるが家中は吃驚し、禪師は若旦那の氣狂ひを癒したので自分が氣が狂れたと噂してゐる聲が、禪師耳に入つたが一向無頓着で、鬮體を振

廻して置いて戶外へ飛出して遊廓の方へドン／＼往く、松柏は息を切つて後から跟いて往くと、其後から無数の人が「ソレ禪師が鬮體を持つて年始に歩いてゐる」と、ゾロ／＼尾いて往くので大層な騒ぎ禪師は關はず「目出たい／＼」と云ひながら廓へ入つて、鍵屋長兵衛の店前へ立つ長兵衛は戶外があんまり鬧しいので何氣なく飛出すと、禪師は其頭の上へ件の鬮體を乗せ、

惡氣なき此鬮體 穴賢

是れより他に目出たきはなし

と仰有つた。長兵衛は呀と驚き「エ、禪師様、何うか御勘辨を、今

日は正月元日まだ年越が濟んだ許りでございます、何うぞ御助けを「ハ、ハ、年越をした許りだから此目出たい物に乗せて遣る」何が目出たいものではございません、這麼縁起の悪い物を御携になりましては頓と閉口致します、私も漸く年を一つ拾ひました處でございいますから「然うか年が一つ何處かに落ちてゐたか」へえ恐れ入りました、併し此通り門松も立つて居りますから、鬮體だけは御勘辨を願ひます「うむ然うか、お前は分らん奴だな、

門松は冥途の旅の一里塚

目出たくもあり目出たくもなし



何うぢや、此歌の意味は分らんか「へゝえ、何うも恐れ入りました」  
長兵衛は惘れて眼をバチクリ。

#### 四三 貧道も女の傍に居たい

其處へ此騒ぎを聞いた地獄太夫が出て来た。「これはく、禪師様、  
御約を違へず、能う御出下さいました」「いや太夫か、貧道は人と約  
束したら違へるのは大嫌ひだ、年始に來たよ「有難う存じます、御  
好みの御饗應を用意致して御待申上げました」「然うかそれは辱い  
通つても能いか」「是非御通り下さいまし」松柏は驚いて袖を控へ、

「一寸御待を願ひます、今日は正月元日でございませぬのに、恁様  
な不淨な場所へ御上りは宜しくございませぬまい」「ナニ關はんよ、何  
事も己れの心一つだ、口に諸々の不淨を説くも、心さへ不淨で莫け  
れば關はんのだ、捨て、置かつしやい貧道も女の傍に些しは居たい  
わ「ハッ恐れ入りました」太夫は笑つてゐると、禪師は草鞋を脱いで  
座敷へ通り「太夫年玉を遣らう」「有難うぞんじます」「ソレ是れだ、  
受納して呉れるか」「唯、有難く頂戴いたします」禮を云つて傍にあ  
る扇を開き「何うぞ是れへ下し置かれまするやう」それへ觸體を受  
けやうとすると、松柏はそれを押へ「太夫それは宜しくない、御前

は禪家悟道を極はめたといふがまだ駄目だ、折角禪師様が下すつた  
 髑髏、それを穢いと思ふから扇で受けるのだらう何うだ「オホ、  
 、それは違ひます、妾は扇を以て仁義禮智信この五常を備へたもの  
 と思ひます、まづ暑さを凌ぐのが仁、親骨子骨揃つて助け合ふのが  
 義、挨拶に用ゐるのが禮、風を招ぶの智、要を締めてゐるのが信で  
 ございます、夫故扇を以て御受致すのに差支はございますまい「ま  
 たやられた」禪師は笑つて「松柏黙つてゐなさい、お前は歌人だ、  
 歌道にかけては他に優れてゐやうが、禪家悟道にかけてはまた修業  
 が足りない、太夫にあやまんなさい」松柏凹まされてゐる處へ鍵屋

長兵衛袴をつけて其處へ出て来た「え、禪師様、先刻は飛んだ失禮  
 いたしました、髑髏を穢いの不淨のと申しましたのは私の過り、何  
 うぞ御勘辨を願ひます、門松は冥土の旅の一里塚とお詠みになつた  
 お歌でスツカリ悟りましてございます、就きましては是非御覽に供  
 へ、若し願へますれば御筆を染めて頂きたい品がございませう「あ  
 う然うかい何品だな、額かそれとも掛軸か「否え左様ではございま  
 せん、兎も角も御覽下さいまし「好しく見えて遣らう」其處へ若い  
 者が二三人で持つて来た者がある、見ると大きなどつしりとした御  
 殿向きの襦袢で、是れが太夫の春の襦袢らしく、成程一人では持て

相もない立派なもの、金糸銀糸の縫模様で、閻魔大王から牛頭馬頭の鬼、浄玻璃の鏡、血の池、針の山等地獄の態を表はしてある。禪師それを座敷の中央へ擴げさせて見てゐたが「太夫、是れはお前の好みか」「左様でございます、恚う云ふ稼業を致して居りますから、何れ來世は地獄へ墮ちる事と存じまして、此通り支度を致しました」「ふむ左様か、それで貧道に何か書いて呉れと云ふのか」「唯、御覽の通り裏が白綸子でございます、是れへ御筆を願ひたいのでございます」「好しく書いて遣らう」長兵衛が早速用意の筆墨を揃へると、禪師無造作に筆を執つて何か書き始めた、太夫や長兵衛は勿論其處

にゐる一同も眼を皿のやうにして、何を書いて下さるかと見てゐると、恰度背中にあたる處へ丸い物を書き、兩方へチヨイ／＼筋を引つ張つて角の如なものを出し「さあ是れで宜しい」と筆を擱いた。さあ一同には些しも分らない。

#### 四四 桶襠の裏へ墨繪の角盟

地獄太夫は禪師の描いた繪を見て凝と考へてゐるが、傍に居た者は黙つてはゐない、各自小さな聲で「何だらう」「左様さ何だらう、分らないね」「分らない」「まづ丸い物があつて棒が四つニヨキリと

出てゐる、月に霞かな、然うでもなさうだ、コリヤ鍋の蓋を二本の六尺棒で押へた圖かな「豈夫然うでも莫らう」長兵衛は耐らなくなつて「禪師様へ伺ひます」「何ぢや」「是れは何でございませう」「アハ、分るまい、角盥ぢや」「え角盥」長兵衛は猶分らない、何故襦褄の裏へ角盥を描いたのか、その意味が覺れないが、角盥といふのは鐵漿などを附ける時に使ふ耳盥の兩方へ角の生へたやうなもの、段々考へて見ると是れは地獄太夫を諭したもので、いつまで這麼稼業をしてゐないで、早く足を洗つて鐵漿でも附ける如に心掛けろといふ謎に違ひない。太夫はそれと思ひ當つたので涙を流して欣ぶ。

長兵衛も「誠に有難うございました、是れからは心を淨め、早く廢業するやうに心掛けます」と禮を述べ、それから料理萬端取揃へて大層な御馳走、夕方御機嫌克く御歸りなすつたが、この襦褄が評判になつて裏を見に来る人が澤山ある、これが寶物になつて鍵屋は益々繁昌し、地獄太夫も愈々全盛になつて來たが、禪師から諭された一言が氣になつて稼業に實が入らないやうな有様、到頭一と思ひに廢業して素人になつたのはその翌年の春、長兵衛も永い間よく稼いで呉れた奉公人の事なり、自分もモウ悟道に入つて禪學を學んでゐる事として、太夫の爲めに廢業を祝して大層な祝ひ物をし、太夫か

らは伴の襦袢を鍵屋代々の寶物にと贈つて改めて親類となつたが、  
 恰度此時小西屋竹次郎の病氣もスツカリ癒つてゐたので、太夫を竹  
 次郎の女房にしやうと長兵衛がいろ／＼氣を揉み、早速禪師の許へ  
 相談に往きました「え、御免下さいまし、禪師様は御在庵でゐらッ  
 しやいますか」相滄らず松柏が出て來た「イヤ是れは長兵衛さん能  
 くお在だ、禪師様はお在だ、關はんからズツト通んなさい」「それで  
 は御免を被ります」通つて見ると禪師は例に依つて莞爾してゐる  
 「やあ長兵衛かい能く來なすつた、太夫はモウ廢業したらうな「唯、  
 仰せの通り廢業致しました、就きましては太夫を……」といひか

けると、禪師はそれを押へて「好しく熟く分つてゐる、小西屋の  
 竹次郎の許へ嫁に遣らうと云ふのだらう」「へえ「違ふか」「どうも御  
 眼力恐れ入ります、眞個仰せの通りでございます」「然うだらう、然う  
 なくては適はぬ事だ、それでこそ竹次郎が苦勞した効もあり、貧道  
 が髑髏を持つて年始に歩いた効がある。世話をして遣んなさい、  
 竹次郎の父利兵衛も喜びこそすれ不服を云ふ筈はない併しお前が往  
 き憎ければ貧道が往つて話をして遣る「有難い事で……」乃で禪  
 師が小西屋へ往つて話をすると、竹次郎は勿論利兵衛も喜んで直ぐ  
 話が纏まる、地獄太夫は茲に更めて小西屋の嫁となり、夫婦至つて

仲が睦しい。長兵衛も悟る處あつて鍵屋を人に賣拂ひ、其金を携つて故郷河内若江へ引込み、田地畑を買つて生涯百姓で暮したが、寶永二年の火事に惜しい哉寶物の襦袢を焼いて終つたといふ話。一方の竹次郎は七年の後病死し、地獄太夫は尼となつて七十三歳の長壽を保つたはめでたい。

四五

天の笠は掛場所が無い

禪師住吉の社内へ庵を結んでからモウ餘程になる、其内松柏は京地へ歸らなければならぬ事となつて此地を出立し、今は禪師は話對

手もない寂しさに、竟に大和路の見物を思ひ立ち、供をも連れぬ一人旅、氣委せに紀の國の方へ向ふと、途中の景色は又別段、春の山は一ト入豊かに、氣ものんびりする處から、ブラ／＼と歩いて往くと、何處の大名か、二三萬石の質素な供廻りで、紀州路へ向つて往くのに出後になり先になりして往くと、最初の内こそ双方別に氣にもしなかつたが、其の翌日も又道中で一緒になると、大名の方が禪師に眼を注げる如になつた。途中の小休みの時家來に命じて禪師を傍近く招いで「御坊は何方から何方へ往かれる」と訊ねた。禪師の風采が毎の通り餘り宜しくない。大名は頻りに頭から爪先まで見

下してゐるが、禪師は一向平氣なもので「貧道は身を雲水に託して諸國を遍歴する貧僧ぢや、別に何方へ往くといふ的も莫ければ、何處から來たかそれも確とは覺えてゐないよ」と鷹揚に答へると、大名は勃然とした様子で「宗旨は何宗ぢや」と些し聲が大きい。禪師は益々沈着いて「八宗兼學ぢや、併しまづ禪宗といふのぢやらうな、師匠が禪宗だから「御坊少し氣が狂れてゐるな」然うかも知れない」「名は何と云はるゝ」「名前かえ、それは………」と云つたが禪師も是れには窮つた。豈夫出鱈目も名乗れもせず、然うかと云つて今の言葉が我れながら少し他を愚にしてゐるやうなので、禪師程の人も

些し躊躇したが、突如呵々と笑つて「一休」と云つた、その一が明確しないで休といふ聲が高かつたので、只キユーといったやうに聞えた爲め、今度は大名の方が笑ひ出した。「御坊今キユーと云つたか、それが御坊の名か」「まあ然うだ」然らば訊ねるが御坊は一體何處の人だ「京都」「ナニ京都、して何といふ師に就て禪學を修められた」禪師是れにも窮つたが據ろなく「養叟禪師」と答へると大名は突如禪師の手を取つて上座に直し「身共も最前から御坊の番ならぬ様子を見て、只人ならじと思ひ居つたが、養叟禪師の御弟子と云はるゝからは、近頃住吉の邊りに庵を結ばれる由承る一休禪師に在さぬ

か」と丁寧ていねいに訊たづねる「ハ、ア露あはれたかい、如何いかにも一休きうぢや、今いま貧道ひんどうが一休きうと申まをしたらキユーといふ名なかと訊ききなすつたが世よの中に那樣そんな名なはあるまいよ「恐れ入おそりました」是これから旅たびを一つにする事こととなつたが、モウ陽氣やうきもソロ／＼暖あたかい時じ分ぶん、禪師ぜんじは笠かさも被かぶらず、坊ぼう主頭すあたまのまゝで平然へいぜんとして歩あるいてゐるに、大名だいみやうは見るに見兼みかねて一蓋がいの笠かさを差出さしたし「御壯健ごさうけんの御身おみなれば笠かさを召めさす共ともお厭いとひはござるまゝいが、頭つりひを日ひに照てらしてお歩あるきなさるは宜よろしくござらぬ、何どうぞ是これを召めしまするやう」と丁寧ていねいに薦すすめると、禪師ぜんじは「折角せつかくながら貧道ひんどうには天てんを笠かさに戴いたて居ゐるから斷ことる」と云いつて菅すげなく斷ことる、大名だいみやうは「然しか

らば御氣委おきませに」と云いつて其儘そのまにして其夜そのよ一つ宿屋やどやに泊とまつたが、禪師ぜんじは究屈きうくつだからと別べつに座敷ざしきを取とる。其夜そのよ大名だいみやうは家來けらいをして「一献差こんさしあげたければ狂まげて御越下おこくだされたい」と迎むかへると、禪師ぜんじは承知しょうちして座敷ざしきへ入はいつた處ところを透すかさず「他の座敷ひとざしきへ入はいるに何故なぜ笠かさを御脱おぬぎにならぬ」一本ほん參まゐると、禪師ぜんじ澄すましたもので「天てんの笠かさは脱ぬいでも掛場かけばが無い」

## 四六

下したから上うへへは何なにが下さがる

其晩そのばんの事こと、その大名だいみやうは旅たびの徒然つれづれに一つ禪師ぜんじを困こまらせやうと思おもひ、家來けらいに窃そつと雀すずめを一羽は購かつて來こいと命めいじた。家來けらいも殿様とのさまは何なにを爲なさる



のかと思つたが、驛中を捜して辛く一羽購つて來ると大名は大喜び酒闌の時その雀を掌にしツかと握つて禪師の前へ突出し「禪師此拳の中に雀がござるが、生きて居りませうか死んで居りませうか」と訊ねた大名の肚では、禪師が若し生きてゐると云つたら握り殺して終はう死んでゐると云つたら逃がして遣らうと云ふので、凝と返答を待つてゐると、禪師は少時無言でゐたが、對手の様子にそれと察したか、只一言「無」とやつたので「禪師『無』とは何事ござる現に此拳に雀が一羽あるに『無』と仰有つたはその意を得ませぬ」と詰寄ると、禪師大笑して「成程雀の居るのは貧道も能く知つ

てゐる、ダガ今貧道が生きてゐると云へば握り殺すだらうし、死んでゐると云へば逃がして終ふに違ひない、さうしてみると何方にしても『無』ではないか、ナンと能く分つてゐる筈だが」と遣り返したので、大名一と縮みに縮んで終つた。旋て禪師は廁へと立つのでソレ御案内とを家來が立ちかゝるのを「それには及ばぬ」と制して置いて。敷居をヒヨイと跨いだ儘「何うだえ、貧道は此敷居から出るかえ入るかえ」是れにもマンマと遣られた大名は口惜しくて耐らず「好しく其儀ならば何か難問を持出して一番うんと苦しめ、二つには此上禪師にどの位ゐの器量があるか試さなければならぬ」と

いろいろ考へた末に「なんと禪師、世の中には化物といふものが真にあるものでござらうか無いものでござらうか」とズバリとやつてさあ怎麼だ窮つたらうと疑と見てみると、禪師は同じく澄したもので「化物かい、それは別段難しい事はない、あるやうで無いやうで始終中間にブラ／＼してゐる」是れはしたり、一休禪師ともあらう御方が、ハッキリと御答へを爲さらず、中間にブラ／＼してゐるとは言語同断、甚だ不似合な事と存するが如何」對手は火の如に慍つてゐる。禪師は益々沈着いたもの「コレ好、物を考へて見さつしやい、幽霊化物など、いふものは、人の神経で何うにもなるもの、即

ち有りと思へば有り、無いと思へば又無い、すべて一心の赴く處に従つて見えもすれば見えない事もある、だから貧道が中間にブラブラしてゐると云つたのは當然では無いか」此時大名はつく／＼感心して恐れ入つた如だが、まだ懲りすまにモ一つ難問をして遣らうと膝を進め「禪師、拙者の菩提寺の和尚が去る頃或る人から、下から上へ下るものは何であるかといふ奇問を受けましたが、和尚も是れにはホト／＼閉口し、其時拙者にも名答を求めて参りましたが、實はまだ其儘になつて居ります、幸ひの御面會、此事について御教訓を賜はりますれば有難くぞんじます」と、今度は下から出て尋常に

問を發した。いかな禪師でも是れには窮るだらうと思ひの外即座に

藤棚の水に映りし花の影

下より上に下るものかな

「是れぢや、國表に歸つたら和尚に能く云ひなさい、此位ゐの事が分らなければ寺を開いて貧道の許へ修行に來いと叱言を云つて遣んなさい、莫迦々々しい」大名舌を捲いて「ア、恐ろしい人だ」

#### 四七 禪師の情と薬師の利益

禪師愈々紀州路へ入つた。今は連れも何も無く暢氣に旅をしなが

ら、景色の美しい處の松の根方へ腰を掛け、大きな握飯をパク／＼食つてゐると、年頃二十五六の腫物だらけの男が、二本杖に絶つて一足歩いては休み、二足歩いては息を吐きながら禪師の休んでゐる前の木の根方へドツサリと腰を卸した。「結構なお天氣でございませう」「好い天氣だ、お前は何だえ」「病人でございませう」「それは分つてゐるが何うした病だ、一體何處の者だ」「大和郡山在の者で、些と放蕩が過ぎた爲め瘡毒に悩みますのを、兩親や親類がお前は因果者だから四國の八十八ヶ所詣りをしろと申します故恚うして歩いては居りませんが何分歩けません」「何といふ名だ」「治助と申します」「路銀を持

たずに出たのか「へえ二兩許り持つて出ましたが、落したのか取られたのか一文無しとなつて終ひました」「それは可かん、一文無しで四國を廻れるものではない、兎も角も此握り飯を食ひなさい」「有難うございます頂きます」「そこでな治助、それでは迎も八十八ヶ所詣りは能まいから、薬師へ信心しなさい」「へえ、薬師は瘡毒の薬でございませうか」「馬鹿を云ひなさい、決して然う云ふ譯ではないが、お前が是れから八十八ヶ所を廻ると二年も三年もかゝる、其中には毒が廻つて死んで終ふそれよりは峯の薬師へ参籠し、命は無いなものと覺悟して七日の間斷食し、一心に薬師を祈つて見なさい、必然御利

益があるだらうと思ふ、尤も斷食をしまいと思つても一文なしでは自然斷食をしなければなるまいから恰度好い「左様でございますか」「それもな身體が癒りませんでは農業も出來ず、兩親に孝養を盡す事ができませんからと云つて、一心に御頼み申して見るが好い」「左様なれば仰せに従ひ是れから薬師様へ参りませう」「お、然うしなさいお前に幾らか手當をして遣る事も知つてゐるが、些かでも金錢があるし氣が弛むから、今からモウ斷食してかゝるが好い」「唯、お指圖に従つて一心に全快を祈ります、御出家さん貴僧何處のお方でございますか瘡毒が癒りました時には御禮に伺ひたうございますから、

御土地と御名前を仰有つて下さいまし「申戯いつては困る、禮なぞに來られては臭くつて堪らん、まあ、貧道の名前なぞ訊くには及ばんから早く往きなさい、縁あらば重ねて逢はれる」云ひ捨て、杖つて終つた。治助は據るなく禪師の後ろ姿に手を合はせて拜み、杖に縋つて峯の薬師へ參詣して一心不亂に祈願を籠めはじめた「モシお薬師様、私は心がらとは申し乍ら瘡毒を患つて如何にも身體が動けません、恁様に腐つた處が出来ましたから四國八十八ヶ所を廻らうと思つたら、途中で遇つた御出家さんが貴方にお願ひ申せと勤めましたから參りました、どうか一週間の中に必然癒して下さい、是

れから孝行して貴方にも御禮いたします」と、人の誠は恐しいもので、只モウ一生懸命に祈ると、七日の夜には疲れ切つて綿の如く倒れたが、現のやうに薬師如來が來て治助の身體中を撫でたかと思ふと目が覺め、それから瘡毒がスツカリ癒つた、さあ治助の喜びは一通りでない、薬師堂へ頼んで國許へ知らせると兩親が飛んで來て薬師様へいろいろ禮物を供へ、さてその御出家さんはと其後半許り尋ね、漸く禪師といふ事が知れたが、何處に御出なさるか分らない翌年漸く新樹庵でお目にかつたといふ話、峯の薬師利生の一節。

## 四八 天地の間に生れた坊主

禪師高野山へ上る。流石は名高いお山、鯉岩、女人堂、無名の橋など様々の名所がある、それを見物して涅槃堂の前まで来ると、其處に大きな長持があつた「あゝ、丁度好いドッコイショ」と腰を掛けて休んでゐると、役僧が人夫四五名を連れてそれへ近附いたが、是れを見て驚いた「モシ〜御出家、その長持には大槃若經が納まつて居る、今六角堂へ入れやうとする處を、俗人ならば知らぬ事、出家の身で腰を掛けるとは飛んだ事をなさる、長持の表に大槃若經藏

と記した札のあるのに御氣が附かんか「成程それに氣が附かなかつた、併し折角休んだものだからモウ少し休ませて貰ひたい」「それは可けません、大槃若經の上に腰を掛けると佛罰が中ります」「左様かな、とんと那樣事の貧道は知らん」「何宗で御在なさる」「袈裟法衣を見たら分りさうなもの、禪宗だよ」「ナニ禪宗、それなら就中堅い宗旨、何う云ふ譯で大槃若經へ腰を掛けなすつた」「又始めたかい、幾ら何と云つても氣の附かん者は仕様がな、好しく〜當山の住職に遇つて貧道が謝らう、案内しなさい」「是れは怪しからん、當山の方丈は濫りに人にお遇ひはなさらん」「ナニ貧道なら遇つて呉れるよ、

「アハ、取逆せてゐなさるな、一體貴僧は何處の何といふお人ぢや」「京都紫野大徳寺住職一休といふ」「えッ、一休禪師」と云つたが一問許り飛退つて平伏した、人足も譯は分らないが頭を下げてゐる禪師笑ひ乍ら立つて少時長持に向つて讀經し「さあ〜是れで大槃若經を淨めたから持つて往きなさい、貧道の悪い處は幾重にも謝る」「何うも恐れ入りました、兎に角本坊へ御案内致しますから御休息遊ばしますやう」「イヤ折角だがそれは困る、表向きにされると出向ひだとか饗應だとか面倒で仕方がない。それが厭さにツイ長持へ腰を掛けたやうな譯だ、後で住職に宜しく云つてお呉れ」「デモそれでは

後で拙僧が叱られます」と云ふのを後方に聞流してドン〜那智の瀧の方へ往くと、流石に日本三大飛瀑の一と云はれる程あつて、落ちる水は全で布を晒すが如く、何とも云へぬ壯觀なものには、禪師も心に感じて木の根に腰を掛け、少時煙草を燻らしてゐると、傍に六十許りの老爺の順禮が、鉦を鳴して瀧に向つて御詠歌を唱へてゐる「おい〜お爺さん、面白くない流行唄だね」「へえ」「何だいその歌は」「歌といつて流行唄ではありません、三十三番の札所だから御詠歌を讀んで居ります」「然うかい、何う云ふ望みで讀むのだい」「變な御訊ねですな望みと云つて何うか來世は極樂へ往きたいと思ひまし

て「然うかい、お前は極樂といふ事をまだ知らないと見えるな、身代を子や孫に譲つて、自分は何時冥土へ往つても心にかゝる事はない、それが即ち極樂だ、極樂とは樂しみ極まると書く、人間齡を老つて氣樂に世を送る位の樂みはない、何も故ら極樂行を願ふには及ばんではないか、お前の笠に迷期、三界、五後、十方、本來、無東西、何所、南北と、チャンと極樂へ行く事が書いてあるではないか一體誰れが是れを書いた「檀那寺の和尚様でございます」「それ見なさい、檀那寺の和尚もお前の極樂行を知つてゐるのだ、別に御詠歌を讀まなくつても極樂へ往けるのだ」「へえ、それは何うも有難い事

だ、大丈夫極樂へ往けますな「往ける、貧道が請合ふ「有難うございます」「一體貴僧は何方で「貧道かい、天地の間に生れた坊主一休だ「へえ、禪師様か南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」

四九 天智天皇月見のむしろ

紫野大徳寺で禪師の御不在を預つてゐる哲梅はじめ弟子一同は、モウ京都も大分穩かになつたから是非御庵をと、哲梅他一二名が總代で住吉の社内へ御迎ひに出ると御在なさらぬ。大和路見物にお出掛と聞いて後を追ひ、紀州で御目に掛つて、仔細を御話申し、



やうやく新樹庵へ御連れ申すと、久々の事で新樹庵へ訪ねる人が引きも切らない。當時東山殿といはれる將軍義政奢に長じ、古器といふ古器、珍品といふ珍品を價を惜まず買上げ、贅澤に贅澤を盡すのを禪師苦々しく思つてゐると、義政も禪師が頃日新樹庵へ歸つたのを聞いて迎ひの使者を差立て、お茶を參らせたまふ故、明日御登營下されたいと申入れると、禪師快く承諾して翌日定め刻限に東山殿へ出た。相變らず汚い姿を義政覽て「禪師久々である」「是れはく將軍家には御機嫌麗はしく大慶に存じまする」「うむ予も禪師の壯健の態を見て満足に思ふ、茶を參らせる」是れから義政自身禪師を茶

室に導き、一亭一客のお茶といふ丁重の扱ひをされる、座敷には珍器珍什を處狭しと陳列し「禪師何うじやな、皆相當の年數を経たもので、價も貴い物ぢや」「左様でございますか、古いのが宜しければ清水觀音の傍にある石地藏は餘程古いが如何」「それは可かん、茶席に石地藏は仕方がない」「左様なら私後小松院より拜領したる天智天皇月見の筵、老子の杖、周光坊の茶碗、此三つの品を献上したく存じますか如何孰れも稀代の珍品でございますか」「うむそれは重疊、苦しからずば受けたい」「併し將軍家に對し只献上といふのも心苦しい次第故、何程にても御買取を願ひたい」「最と易い事ぢや、何程

にて申受けられやうな「三千兩」左様か然らば明日金子を持たせ遣はす故、其者へ只今の三品を渡し呉れるやう「承知致しました」側に居た仁木、細川、山名等の御歴々は驚いて、禪師は何うして那樣珍器を有てゐるかと思つたが仕方がない、さて翌日になると、多勢の家臣が三千兩の宰領となつて新樹庵へ金を届けに來た、哲梅は驚いてゐると、禪師は其金を受取り、納屋にあつた蕙を一枚と、垣根の竹を泥の附いた儘一本に、猫の腕を一つと都合三品使者に渡した使の者は吃驚して彼是と争つたが、禪師が後から往くといふので、據ろなく立歸つてその三品を義政公に見せると、東山殿眞赤にな

つて怒つた。其處へ禪師澄して登營したので、義政公禪師をハツタと睨み「禪師、御坊は子を欺いたな、餘人ならぬ御坊、一命は助け遣はす、重ねて登營罷り成らん、退れッ」と大喝し、今や席を蹴つて立たうとする袂をしつかと捉へ「御立腹とは何事でござる、上は奢に長じ給ひ、古器珍什には價を惜ませられぬ由洽く奸物の知る處となり、勝手次第造り事をして莫大の金銀を上より欺き居るを知り給はざるか、天智天皇月見の蕙も老子の杖も周公坊の茶碗も、是れを本物と思へば眞物で通るもの、無ければ無いでそれでも濟むもの上は御存知あるまじきも、山城國には凶作の爲め一揆起らんとする

様子あるに依り、彼の三千兩は上より下し置かれたる旨篤と申含め  
農民一同へ直に下渡したり、以後奢を改め政治向に御賢慮回らされ  
なば、禪師此場に御手討になる共苦しからん、如何思召さるゝ」義  
政公是れを聞いて顔を赧め、下俯いて一言もなく旋て其の場へ手を  
突いて「禪師、好う異見致し呉れた辱い。莛や杖は記念として大  
切に藏ひ置くぞ」と仰有つた。禪師頭を上げて「御入用ならまだ幾  
らでもございます」

五〇 名僧一休禪師の大往生

文明八年の春、禪師不圖病の蓐に就いた。哲梅以下多くのお弟子  
は、交るゝ師の枕邊に侍して、手厚く看護をするが怎麼も様子が  
宜くない。一日、禪師は哲梅に命じて、諸所に散つてゐるお弟子と  
俗縁の人々を枕頭へ招いた。集まつた者は竺齋、紅甚等の人々を始  
め、お弟子を加へてすべて三百五十餘名、病室に近い座敷へ詰め掛  
けると、禪師は障子襖を取拂はせて病蓐の上不起直り「皆の衆よく  
来てお呉れだ、貧道も今まで諸方を廻り歩き、面白可笑しい事を仕  
盡したが、モウ定命も竭きかけた。命あるものは喪び、咲くものは  
散るのは定まる約束で今更申すに及ばん、貧道は明年の冬を以て此

世を去る、就ては何か尋ねたい事があらば生前何なりとも教えて上げる、遠慮なく訊ねなさい。瞑目したとて嘆いてはならぬ、何うぞ八宗の人々を集め鐘や太鼓を叩いて踊つてお呉れ、皆んな是れだけ頼むよ、實はな、昨夜阿彌陀如來が貧道の許へ来て何時來ると訊ねたから、然うさ往きたくも無いが來年十一月二十一日に必ず往くと約束したら、ではそれまでに田舎大工を集めて貧道の住む家を拵へて置くといつてゐたよ」と氣樂な事を云つて御在なさる。見ると餘程疲れてはゐるが、言葉もしつかりして却々の元氣に、哲梅が膝を進めて「禪師、お見受け申した處では一年や二年で遷化なさらうと

は思ひ寄りませぬ、何うぞ左様な事を仰せられず、永く此世にお留り下し置かれて我々一同に悟道を御諭し下さいますやう只管願ひ上ます」と云ふと竺齋と紅甚は一緒に進み出て「禪師様モウ私共も七十の坂を越えまして、身代は悴や嫁に譲り、至つて氣樂な者でございませぬ、禪師様に御別れ申しましてはモウ此世に樂みはございませぬ、何うぞモウ三四年の處を阿彌陀如來にお願ひなすつて、我々と共々此世にお留り下さるやうお継り申します、それとも來年どうしても彌陀の淨土へ御出になりまするなれば、我々兩人も御召連れになりますや、お願申します」子供が親に甘へるやうな事を云ひ、

凝と禪師の顔を見上げると、禪師カラ／＼と笑ひ「那樣事を云つても可かんよ、灯するものは消え、息あるものは死する、幾度云つても一つ事は同じ事だ、まだ貧道が此世を去るにしても一年の間があるから其間に悟道の事でも訊きなさるがよい、コレ／＼哲梅、お前もモウ老人ぢや、能く永い間貧道の面倒を見て呉れた。貧道が彌陀の浄土へ往つた後は、この新樹庵を何分頼みますぞ、あゝ今日は一同が来て呉れたので近頃になく胸が開けて誠に晴々とした。同へ何か馳走をしてお呉れ」哲梅は心得てそれへ用意の茶菓子を出すと一同は静かに茶を嚙んでゐるのを見て「あゝ今日程好い心地の事は

今迄にない、併し皆んな平常は魚でも食べて身を養ひ、充分壯健になつて五十年の者は六十年、六十年の者は七十年と、成りたけ此世の風に當つてお呉れ、貧道は今迄随分悪戯もしたが、悉く悟道の訓へちや、あゝ面白い／＼と切りに欣んだ事が東山殿へ知れ、早速御見舞の使者も来り、畏き邊りの御使者も見えたが、百官有司の人々は他ならぬ禪師の萬一を氣遣ひ、それ／＼用意を整へてゐるうちに、文明十三年十一月二十一日といふに眠るが如く大往生を遂げた此報を得た洛中洛外の人々は今更の如に禪師の徳を慕つて其名は今に芳しい。時に禪師齡八十八。(終)

定價廿二錢

不許複製

大正二年七月十二日印刷  
大正二年七月十六日發行

編輯者

印刷者

東京市日本橋區蠣殼町二丁目九番地

磯部辰次郎

東京市神田區表神保町十番地

今成溫平

(今成印刷所)

發行所

東京市日本橋區蠣殼町二丁目九番地

磯部甲陽堂

振替東京一五〇五六番

一休和尚

274  
293

終

